

『荒地』における「模倣呪術」の構図

——断片から統一への祈り——

斎 藤 昭 二

『荒地』における「模倣呪術」の構図

——断片から統一への折り——

斎 藤 昭 二

普通の人の経験は混沌として、不規則で断片的である。……詩人の頭の中では、こうした経験が絶えず新しい全体を形づくっているのである。

——T. S. エリオット「形而上詩人」——

I

『荒地』(*The Waste Land*, 1922) の驚きは二度ある。一つは、初読の折りの、読むものを眩惑させるまばゆいばかりの断片性のもたらす驚きであり、今一つは、実はこれがウェストン＝フレイザー的な聖杯伝説や古代の豊穡祭祀を枠組みとすることで達成している統一性に気づかされたときのさらなる驚きである。

後者の、この詩を構成をもった「統一のある全体」(a unified whole)¹⁾と見做す解釈は1939年クリアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) の研究²⁾をもって始まり、これがその後の『荒地』研究の方向を決定する。爾来この詩に用いられているアイロニカルな対照 (contrast) や枠組みとして用いられた漁夫王物語および古代の豊穡祭祀に共通して見られる〈死と再生のパターン〉をエリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) の「時代精神」³⁾に根ざす現代文明批評と捉え、この詩を第一次世界大戦後の荒廃したヨーロッパの危機的状況をうたった詩であるとする解釈に結実してきた。

しかし、『荒地』のような大作の場合、こうした解釈がそのすべての面を語っているわけでは勿論ない。事実1931年の『ランベス会議後の感想』(*Thoughts After Lambeth*) の中で、この種の解釈の先例に対し、

『荒地』という詩を書いたとき、好意的な批評家の何人かが、私が「ある世代の幻滅」を表現したと語ったが、これはナンセンスであ

る。私は彼らに、幻滅という彼ら自身の幻想を表現したかもしれないが、それは私の意図ではなかったのです⁶⁾。

と不満らしき発言をしている。また、『荒地』の構想を抱き始めた1919年前後⁷⁾はエリオットが「大切なのは、詩が何を言っているかではなく、詩が何であるのかということである」⁸⁾とする New Critics たちにより聖典と仰がれた『聖森』(*The Sacred Wood*, 1920) 所収のエッセイを書いていた時期でもある。

『荒地』が「何を言っているか」ではなく、『荒地』が「何であるのか」に注目するとき、言葉を換えて言えば、読むものに二度の驚きを与える断片から統一へという構造に注目するとき、エリオットが「意図」した『荒地』のもう一つの面が見えてこないかというのがこの小論の出発点である。

II

1922年10月『荒地』433行が『クライテリオン』(*Criterion*) 創刊号に掲載されたとき、それが「未知の、また何の予備知識も持たない観客」⁹⁾に与えた衝撃は驚くべきその断片性であったろう。冒頭から急ピッチに、しかもさまざまな面に脈絡もなく転調してゆく。

April is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain. (ll. 1-4)

(四月は一番残酷な月、
死んだ土地からリラの花を甦らせ、
記憶と欲望をかきまぜ、
鈍い根を春の雨で刺激する。)

という高度に抽象的な春の叙景が

Winter kept us warm, covering
Earth in forgetful snow, feeding
A little life with dried tubers. (ll. 5-7)

(冬は忘却の雪で大地を覆い、
ささやかな命を乾涸びた根で養い、
われわれを暖かく守ってくれた。)

で突然過去時制に転じ、それがまた

Summer surprised us, coming over the Starnbergersee
With a shower of rain; we stopped in the colonnade,
And went on in sunlight, into the Hofgarten,
And drank coffee, and talked for an hour.
Bin gar keine Russin, stamm' aus Litauen, echt deutsch.
And when we were children, staying at the arch-duke's,
My cousin's, he took me out on a sled,
And I was frightened. He said, Marie,
Marie, hold on tight. And down we went.
In the mountains, there you feel free.
I read much of the night, and go south in the winter. (II. 8-18)
(夏は シュタルンベルガゼー湖を越え、にわか雨をともなって現われ、われわれを驚かせた。われわれは柱廊で雨やどりをし、再び陽の射す中ホーフガルテン公園に入って行った、
そしてコーヒーを飲み、一時間ほど話した。
わたしロシア人ではありませんわ、リトアニア生まれの生粋のドイツ人です。
子供の頃いとこの大公の家にとまったとき、
彼はわたしを櫓に乗せて連れ出し、恐かったわ。
彼はマリー、マリー、しっかりつかまって、と言ったの。
そしてわたしたちは滑って言った。
山では気持ちのがのびのびしますわ。
夜はほとんど本を読み、冬になったら南に行きます。)

で一転して極めて具体的な一夏の思い出話に飛躍する。夥しい古典の引用のちりばめられたエピソード自体のもつ不可解さに加え、エピソードとエピソードをつなぐ脈絡が、そしてまた五つに分けられた部と部とをつなぐ

脈絡が一読つかみ得ない。こうした断片性が当時の読者にいかに大きな驚きを与えたことか。事実、極く早い時期の反応の一つは、『『クライティリオン』第一号には *The Waste Land* という題のばらばらの詩がいくつか (several seperate poems) 載っている。』(*New Statesman and Nation*, Nov., 1922)⁸⁾ というものであった。

* * * * *

しかし、勿論『荒地』が「ばらばらの詩」でないことは、構想の段階においてエリオットがこの詩を呼び続けていた「一つの長い詩 (a long poem)」⁹⁾ という表現を俟つまでもなく、やがて読むこと自体のうちから自ずと明らかにされる。こうした断片性も次第に相互の脈絡が見え始め、「ばらばらの」断片と思われていたものが、実は連想 (association) の糸でつながっていることに気がつくのである。先に引いた冒頭の場面も「春」がこれに先立つ「冬」の季節を思い起こさせ、さらに過去の「夏」の記憶を呼び覚ます。「夏」は「灼熱の光景」を連想させる等々とつながっているわけである。この連想の糸は随所にさまざまな工夫が施され、第1行目から第IV部末尾 321 行目まで一糸乱れることなくつながってゆく。

I. "The Burial of the Dead" 春 (ll. 1-4)

↓

冬 (ll. 5-7)

↓

夏 (ll. 8-18)

↓

灼熱の光景 (ll. 19-30)

↓

海 (ll. 31-42)

↓

水死の予言 (ll. 43-59)

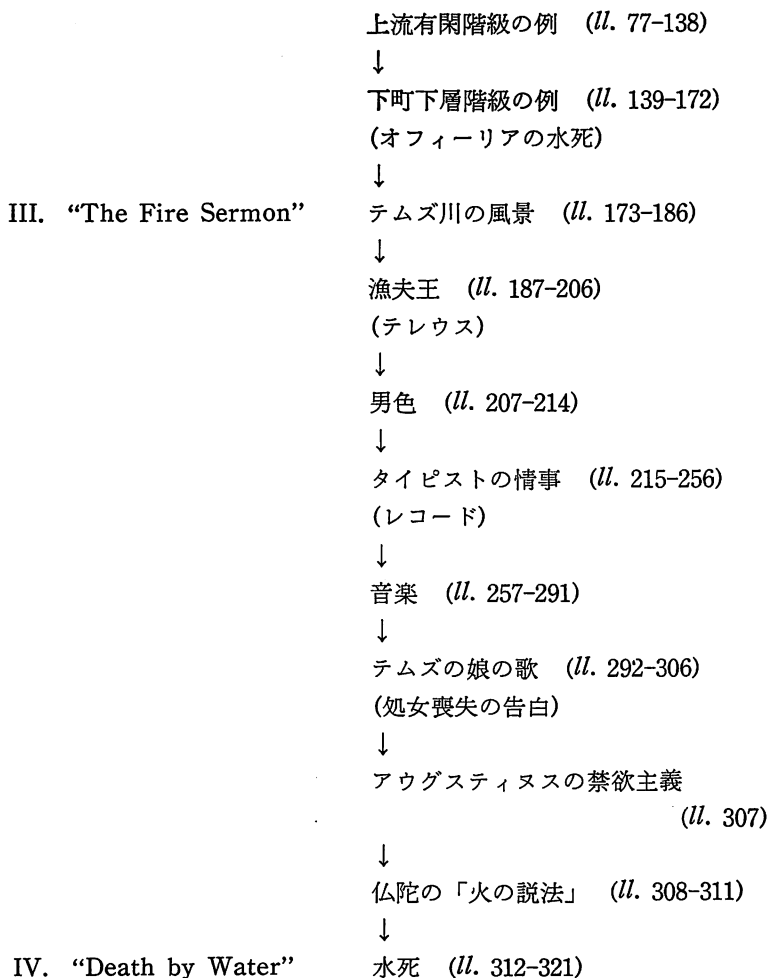
↓

亡霊の群れ (ll. 60-76)

↓

II. "A Game of Chess"

生につながらぬ不毛な性を営む男女



ここまでくると統一をめざすエリオットの意図はもはや疑うべくもない。第V部は、作者がこの詩の必要不可欠な一部と考えた¹⁰⁾自註 ('Notes on the Waste Land') 冒頭で言及されているジェシー・L・ウェストン著『祭祀よりロマンスへ』(Jessie L. Weston, *From Ritual to Romance*, 1920) と J. G. フレイザー著『金枝篇』(James G. Frazer, *The Golden Bough*, 1890) でつながる。両書に共通している〈死と再生のパターン〉をこのコ

ンテキストに当て嵌めてみれば、実は第Ⅳ部末尾までに描かれていた荒廃し死にも等しい状態にある漁夫王とその国土「荒地」¹¹⁾を救済するために、第Ⅴ部で騎士が聖杯探究の旅に出るとつながるわけである。

そして、単純化して言えば、『荒地』のもつこの〈死と再生のパターン〉が現代世界に転移され、「現代は再生しなければならない死にも等しい状態にある」という社会批評がこの詩に読み込まれてゆくことになる。

しかし、ここで注意したいのは、この種の解釈に対し、エリオットが逐一否定的な発言をしている点である。

コンラッド・エイキンが『ニュー・リパブリック』誌上でこの詩を書評したとき、その書評に「憂鬱の解剖」と題をつけたとエリオットに話すと、エリオットは「彼にのみ可能なあの氷のように冷たい怒り」の眼差しで向きなおり、「あの詩には憂鬱なところは何もない！」と激しい口調で言った¹²⁾。

という。また、この詩を重要な社会批評であると賛辞を送った場合でも、

これまでさまざまな批評家の方が光栄にもこの詩を現代世界の批評であると解釈して下さり、実際これを重要な社会批評の一つであると考えてくれました。しかし、私にしてみれば、この詩は人生に対する個人的な全くとるに足らぬ不満からの息ぬきに過ぎなかったのです。単にリズムミカルなぐちなのです¹³⁾。

と彼一流の皮肉な言を弄している。彼の「意図」なるものを完全についているとは思えなかったがためであろう。それでは、理解されることのなかった彼の「意図」とは何であったのか。

Ⅲ

社会批評としての『荒地』観がエリオットにとって心外なものであったとするならば、一体『荒地』創作における彼の「意図」は何であったのか。当然有力な手がかりの一つはこの詩を書いていた頃のエリオットの関心事であろう。

『荒地』の構想を抱き始めていた1919年といえば、彼が有名な「ハムレ

ット論」(“Hamlet and His Problems”)を書いていた年である。「作品『ハムレット』こそ第一の問題であって、人物ハムレットは副次的なものに過ぎない」¹⁴⁾と始まるこの挑戦的なエッセイは、それまでの「ハムレット」批評がどちらかといえばハムレットという中心人物評に傾きがちであったことに注意を喚起した上で、この作品を芸術作品として評価するために、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) がそれ以前の粉本の上に彼独自のオリジナルなものとしてつけ加えた点を問題とする。多層体 (stratification)¹⁵⁾「ハムレット」からいわゆる *Ur-Hamlet* の類の特徴を引き去り、残る「表現することのできない感情に支配されている」¹⁶⁾ ハムレットの精神境位こそシェイクスピアがオリジナルなものとしてつけ加えた点であり、彼はそれの「客観的相関物」による芸術的定着に失敗したのだと結論する。

この「作品全体の効果の重要性」¹⁷⁾を問題とするエッセイは翌1920年エリオット最初の評論集『聖森』(*The Sacred Wood*, 1920)に収められるが、この評論集はこうした収録内容とともに序文中の有名な「詩を考察するときには、まずそれを詩として考察し、他のものとして考えてはならない」¹⁸⁾という言葉により、後に来たる New Criticism の批評家たちにより聖典と仰がれることになる。「大切なのは、詩が何を言っているかではなく、詩が何であるかということである」¹⁹⁾、『荒地』に即して言えば、「大切なのは、『荒地』が社会批評としての思想内容をもつということではなく、『荒地』が断片から統一へという構造をもっているということである」——そんなエリオットの言葉が聞こえてきそうである。

一方この評論集の『聖森』というタイトルは、ジョン・B・ヴィッカーイ (John B. Vickerey) も指摘²⁰⁾するように、祭司職継承の奇妙な掟の行われていたネミの森——『金枝篇』(James G. Frazer, *The Golden Bough*, 1890) 研究の出発点——につながり、この時期のエリオットのフレイザーへの強い関心を窺わせる。フレイザーの『金枝篇』は、勿論エリオット自ら自註で断っているように、『荒地』の枠組みを説明する第一資料である。

とすればフレイザーの『金枝篇』に、〈死と再生のパターン〉以外に、『荒地』のもつ断片から統一へという構造を動機づけた何らかの鍵があったはずである。それは何か。

『金枝篇』において、フレイザーは、ネミの祭司職継承の奇妙な掟 (1.

現任者を殺すこと 2. 彼が護っている聖樹の小枝を折りとること)を解明せんと、類似の例をもとめて、古代の豊穡祭祀に淵源をもとめてゆくが、『荒地』解釈においては、これまでアドーニス・アッティス・オシーリスといった〈死んで甦る神〉の話が『荒地』のモチーフである〈死と再生のパターン〉を提供した点でもっばら取り上げられてきた。しかし、注目すべきはこれに先立つ第三章²¹⁾であった。「共感呪術」と題されたこの章において、フレイザーは、古代人が依拠した呪術の原理を分類している。それによると、古代人の豊穡祭祀の基礎をなす原理の一つは、「類似は類似を生む、あるいは結果はその原因に似る」²²⁾という“類似の法則”であり、これに基づき「呪術師はただ一つの事象を模倣するだけで、自分の欲するどんな結果でも得ることができる」²³⁾とする模倣呪術を行ったのである。何かを真似すれば(模倣すれば)、それが現実起こる。例えば、病気の治療に際し、ダイヤク族の呪医は、「患家に迎えられると、横臥して死をよそおう。そして、死骸としての取り扱いをうけ、箆で巻かれ、戸外に運び出され、地上に捨てられる。およそ一時間もたってから、他の呪医が死骸を箆から出して、これに生命を与える。彼の回復と共に、病人もまた快方に向かうと信ぜられていたのである。」²⁴⁾

この“類似の法則”に基づく模倣呪術という概念を『荒地』のもつ断片から統一へとという構造の解明に適用してみると、『荒地』におけるエリオットの意図は明らかとなる。エリオットはダイヤク族の呪医同様に、自らの創作品である『荒地』という詩を断片から統一へと変貌させることで、現代の断片性が統一へと変貌することを祈ったのである。断片が彼の現実認識であり、統一が彼の理想であることは言うまでもない。

IV

エリオットは1943年に行なった講演「詩の社会的機能」(“The Social Function of Poetry”)において、

詩は社会的目的をはっきりと意識的にもつこともあります。原初的形態においては、この目的はしばしば極めて明白で、例えば、初期の北欧古代詩や聖詠歌をみると、そのうちのいくつかは極めて実際的な呪術的目的——悪しき目をそらすとか、病を癒すとか、あるいは何かの悪魔をなだめるといった目的をもっていたのです²⁵⁾。

と語ったが、エリオットの時代においても、詩のもつこの呪術的目的は痛感されていたに違いない。

『荒地』が、『『ユリシーズ』——秩序と神話』(“*Ulysses, Order, and Myth*”) で語られた神話的方法 (the mythical method) をもち、アドーニス・アッティス・オシーリスといった死んで甦る古代豊穡祭祀の神々や聖杯伝説(漁夫王物語)に共通する〈死と再生のパターン〉をもつことで、今世紀初頭の混迷せる西欧世界の状況を色濃く反映した詩であることは間違いない。しかし、その際にも彼がこのユリシーズ論を書かざるを得なかった動機である

ヴェレリー・ラルボー氏の貴重な論文、といってもこれとて批評というよりもむしろ紹介といっているものだが、これを除けば、これまでに見た批評の中で、この小説で用いられている方法——つまり、『オデュッセイア』の平行使用であるとか、各章に適わしい文体や象徴の使用などといった方法の重要性を正しくつかんでいると思われるものはなかった。この方法こそ注目すべき第一の特徴といつてよいものであるのに、これまでは全体の構造とは何の関係もない単なる面白い工夫であるとか、作家がその現実の物語を扱う上で構築した足場にしか過ぎないと扱われてきた²⁸⁾。

という一節に見られる作品構造への関心に注目してみると、エリオットが『荒地』に託した意図が、決して社会批判的なものではなく、彼なりに切実な祈りの思いであったことが、併せて見えてくるのである。

現代が断片的で混沌としていればこそ、エリオットは自らの作品である『荒地』を断片から統一へと変貌させることで、模倣呪術的に現代という〈荒地〉が〈沃地〉に転化することを祈念したのであり、この意味で『荒地』は「憂鬱な詩」でも「社会批判の詩」でもなく、祈りの詩であったのである。その祈りの思いにふさわしく、この詩は‘Shantih Shantih Shantih (平安なれ 平安なれ 平安なれ)’という祈りの唱句で終わっている。

NOTES

- 1) Cleanth Brooks, “The Waste Land: Critique of the Myth” in *Modern*

Poetry and the Tradition (The University of North Carolina Press, 1939), p. 136.

2) *Ibid.*

3) Cf. F. O. Matthiessen, "The Sense of His Own Age" in *Achievement of T. S. Eliot* (Oxford University Press, 1935)

4) T. S. Eliot, "Thoughts After Lambeth" in *Selected Essays* (Faber and Faber, 1932), p. 368.

5) エリオットの代理人となり、彼の詩集 *Poems by T. S. Eliot* (1920) がアメリカで出版されるように骨を折った弁護士 John Quinn 宛の1919年11月5日付けの手紙の末尾に初めて『荒地』への言及が出る。

I am now at work on an article ordered by *The Times*, and when that is off I hope to get started on a poem I have in mind.

—quoted in T. S. Eliot, *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts* ed. Valerie Eliot, (Faber and Faber, 1971), p. xviii.

6) I. A. Richards' words quoted in T. S. Eliot, *The Use of Poetry and Use of Criticism* (Faber and Faber, 1933), pp. 17-18.

7) T. S. Eliot, "Poetry and Drama" in *On Poetry and Poets* (Faber and Faber, 1957), p. 84.

8) T. S. Eliot, 『荒地・ゲロンチオン』 福田睦太郎・森山泰夫編注 (大修館, 増補5版, 1972), p. xviii.

9) 1919年12月8日付, 母親宛ての手紙の中でエリオットは,

(His New Year's Resolution) 'is to write a long poem I have had on my mind for a long time...' (Valerie Eliot, *op. cit.*, p. xxi)

と書いている。また、1921年5月9日付 John Quinn 宛ての手紙の中にも、(Eliot) was 'wishful to finish a long poem' (as he still described *The Waste Land*) which was now 'partly on paper.' (*Ibid.*, p. xxi) という表現が見られる。

10) 自註 ('Notes on the Waste Land') が「ページ数を増やすための……インキな学識」(Cf. "The Frontiers of Criticism" 1956) ではなく詩の構成にとって不可欠な一要素であることは、1922年付 John Quinn 宛ての手紙からも明らかである。

I have written, mostly when I was at Lausanne for treatment last winter, a long poem of about 450 words [lines], which, with notes I am adding, will make a book of 30 to 40 pages. (Valerie, *op. cit.*,

p. xxii)

自注が初出の *Criterion* (October, 1922) および *Dial* (November, 1922) では省かれ、1922年12月15日発行の NY Boni and Liveright 社版 *The Waste Land* で初めてつけられた経緯は出版社同志の談合による (Valerie, *op. cit.*, p. xxiv)。

- 11) Cf. Jessie L. Weston, *From Ritual to Romance* (1920; The Anchor Books Edition, 1957), p. 12.
- 12) T. S. Matthews, *Great Tom: Notes Towards the Definition of T. S. Eliot* (Harper & Row, 1973), pp. 72-73.
- 13) Eliot's words 'Quoted by the late Professor Theodore Spencer during a lecture at Harvard University, and recorded by the late Henry Ware Eliot, Jr., the poet's brother.' (Valerie, *op. cit.*, p. [1])
- 14) T. S. Eliot, "Hamlet and His Problems" in *The Sacred Wood* (Methuen 1920; University Paperback edition, 1976), p. 95.
- 15) *Ibid.*, p. 96.
- 16) *Ibid.*, p. 101.
- 17) *Ibid.*, p. 96.
- 18) 'Preface to the 1928 edition' of *The Sacred Wood*, p. viii.
- 19) 注6)参照。
- 20) John B. Vickerey, *The Literary Impact of 'The Golden Bough'* (Princeton University Press, 1973), p. 234.
- 21) フレイザー, 『金枝篇』永橋卓介訳 (岩波文庫, 1951), p. 57.
- 22) 上掲書, p. 57.
- 23) 上掲書, p. 57.
- 24) 上掲書, p. 67.
- 25) T. S. Eliot, *Poetry and Drama and Other Essays* 矢野禾積編注 (松柏社, 1979), p. 2.
- 26) T. S. Eliot, "Ulysses, Order, and Myth" in *Selected Prose of T. S. Eliot* ed. Frank Kermode (Faber and Faber, 1975), p. 175.